

平成31年度入学（一般入試 後期）試験問題の出典

総合政策学部

種別		著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	資料A	北川 達夫	不都合な相手と話す技術	東洋経済新報社, 2010年, pp.222 －224より	東洋経済新報社
	資料B	朝日新聞	「哲学カフェ」で熱く議論 「生きている本」と対話	朝日新聞, 2010年1月11日 付朝刊より	朝日新聞
	資料C	暉峻 淑子	対話する社会へ	岩波書店, 2017, pp.58－91 より	岩波書店

平成 31 年度 一般入試・後期

## 総合政策学部

# 小論文 (90分)

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、5 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

資料(A)～(C)を読み、次の問いに答えなさい。

- 問 1 資料(A)の下線部に対して、作者は最終的にどのようなことと考えているか。「絶対」という言葉を用いて 120 字以内で説明しなさい。
- 問 2 資料(C)では、「対話」について、作者はどのような「話し合い」や「話し方」と捉えているか。「対話」と異なる話し方として挙げられている例との対比を踏まえながら、資料中の言葉を用いて 150 字以内で説明しなさい。
- 問 3 資料(B)(C)では、「見ず知らずの人」や考えの異なる人との議論や対話の場が継続されてきた様子が描かれている。そうした継続の社会的背景として、どのようなことが資料(B)(C)から読み取れるか。これら二つの資料中の言葉を用いながら 160 字以内で述べなさい。
- 問 4 現代社会において、立場や考えの異なる人と「対話」する際にどのようなことが必要であると考えられるか。資料(A)～(C)を踏まえ、かつ具体的な例を挙げながら、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

## 資料(A)

そういうことは教養のある人は言わないものです——何度これを言われたことだろう。ヨーロッパで自分の力を試すことを決意した私は、さる国際機関の研修施設でイギリス人のチューター(個人指導員)に徹底的にしごかれた。今から20年以上も前のことだ。しごかれたといっても、いっさいの強制はなかった。言われたとおりにするかどうかは私の自由。ただ、言われたとおりにしなければ、少なくともヨーロッパでは「教養のある人」とは見なされませんよ、というのである。

(中 略)

特に強く否定されたのは「絶対」という言葉だ。「教養のある人」は「絶対に～だ」という表現は使わないというのである。これは後にイギリスやフィンランドに留学したとき、教官や友人からも言われたことだ。私がつい「絶対に～だ」と言うと、周囲から「絶対なんてない!」という声上がる。私の発言の内容に反応しているのではない。それ以前の問題として、「絶対に」という言葉に反応しているのである。その小うるささには辟易したが、彼らの言うことにも一理はある。世の中に「絶対」はめったに存在しないのだ。クリティカルな態度とはこういうことか、と感心したものである。

だが、この気づきは、さらに私を道に迷わせる結果を招いた。「絶対なんてない」という発想が「結局は人それぞれ」という発想に結び付いてしまった。絶対に正しいこともなければ、絶対に間違っていることもない。誰もがそれなりに正しい——という、一種の相対主義に陥ったのである。本書で前にも述べたが、「誰もが正しい」という発想では、各人の違いを埋める努力を放棄しているため、対話も成立しなければ、何の問題解決にもならない。

このような発想に対しては、周囲の評価も厳しかった。優柔不断だ。自分というものが無い。君には「絶対にこうだ」という信念はないのか?——これを言われて、私は戸惑った。「絶対にこうだ」と言ってはならないのに、「絶対にこうだ」と思えとは、どういうことだ?

結局のところ、私は基本的な姿勢ができていなかったのである。真実を追究するならば、唯一の「絶対」という発想は禁物である。自分の考えにせよ、他者の考えにせよ、それを絶対視したら、そこで追究が止まってしまうからだ。これでは真実に迫ることはできない。

その一方で、誰にでも「絶対に正しいと思うこと」や「絶対に大切だと思うこと」はあるものだ。ただ、自分にとっての「絶対」は、必ずしも他者にとっての「絶対」ではない。その意味で、唯一の「絶対」は存在しないのである。そのことを承知のうえで、あえて「(とりあえず自分にとっては)絶対にこうだ」という姿勢で意見を述べるのである。こうすることによって、多様な意見の「違い」が鮮明になり、「違い」同士の衝突が発生する。ここに対話の契機が生まれるのである。対話によって、各人各様の「絶対」の調整を図っていくということだ。

(北川達夫『不都合な相手と話す技術』, pp.222-224, 東洋経済新報社, 2010年より, 一部改変)

資料(B)

**この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。**

(『朝日新聞』2010年1月11日付朝刊、『「哲学カフェ」で熱く議論 「生きている本」と対話』より、一部改変)

## 資料(C)

私の住居から10分ほど離れたところに、魂の飢えに癒えずにいられなくなった、とでもいうように、住民たちが立ち上げたユニークな「対話的研究会」があります。

誰でも参加できます。みな自転車で来られる距離の人たちで、職業も、生活もいろいろ。今、35人ほどの仲間が(仕事の都合で、実際には25人前後の集まりになることが多い)楕円形の大きなテーブルを囲んでお互いの顔を見ながら、自分の生活やそのまわりに起こる事件と、社会、政治、経済とがどんなつながりを持っているのか、対話を通して勉強しています。そして本や新聞で知る知識と自分の生き方をあらためて問い直しています。

対話的研究会は、もう7年も続き、皆勤の人も少なくありません。

その研究会ができたのは、思いがけないことがきっかけでした。考えてみれば、それは思いがけないことではなく、対話欠乏症の社会に対する、鬱積<sup>うっせき</sup>した魂の飢えが噴出した結果だったのかもしれない。そして、対話がない民主主義社会の底が抜けた状態に、こみ上げてくる不安を感じていた結果かもしれません。

(中 略)

私が感動したのは報告者についてだけではありません。聞き手の態度に関しても同様でした。素人の人が、言いよどみ、言葉を探しながらの説明をする時、聞き手は身を乗り出すようにして無言のまま熱い視線を送り、次の言葉を待っているのです。それに応じるように、話し手も自分の言葉を選びながら、地に足をつけて、真実を離れまいとするように話を続けるのでした。

対話とは、聞く人の誠実さによって支えられているものだということがよく分かりました。

(中 略)

特定の人とある目的をもって話し合われる対話に特徴的なのは、個人の感情や主観を排除せず、むしろその人の個性とか人格を背景に、自己を開放した話し方が行われている点です。自己防衛意識が強い人との対話は成り立たないと言われているのはその言い換えでしょう。

対話には、もともと議論して勝ち負けを決めるとか、意図的にある結論にもっていかとか、異論を許さないとか、そういうことはありません。ある論点が何度も発展的に往復するうちに、お互いにとって自然な発見があり、大きな視野が開けるところに特徴があります。結論を得られなくても、対話後にも長く続く問いかけがあり、何年もたってから、その対話の大きな解が得られる場合もあります。

「対話の意味はそのプロセスにある」というのは、以上のような意味だと思います。

このような話し方は、不特定多数の相手に対して、壇上から一方的な話をする講演や講義とは違いますし、もちろん、命令とか、通達ともまったく異質のものです。

考えが違って、私たちは対話の相手に、自分の体験と思考と感情に由来する自分の言葉を語り、相手に対して、ぴったり当てはまる言葉を選んで話そうとします。言葉は解釈の仕方によって多様な意味を持ちますが、対話の中では、言葉をやり取りすることによってその意味が確定されるので、言

葉を通して考える内容は奥深いものになります。対話の持つ魅力に圧倒され、人生観を揺さぶられるような経験を持つ人は、対話が個人的で多様であると同時に、人間に共通する大切なものを語っていることに気がついているでしょう。

(中 略)

人間として対等で、個人の尊重を土台にした話し合いは、「対話が続いている間は殴り合いは起らない」とか、「相互性が続いている間は人間はおかしな方向にはいかない」という言葉が示すように、暴力的解決に対する人間的な対処法であり、人間が獲得してきた特権の一つが対話ではないかとさえ思われるのです。

それは個性と個人の尊厳を基本にした民主主義の根幹になる話し方であるからかもしれません。言い換えれば、対話が成立している社会であるかどうかで、自立した市民社会の度合いが量れるのかもしれない。

ある中学の先生は言っています。「生徒は友人との小さなコミュニティの経験を持ち、その心地よさを経験して、それを外側に広げていく。対話による経験が、話し合い、討論することへの信頼の培養土となる」と。まったく同感です。

とすれば、対話はすべての始まりであり、基礎になっているのではないのでしょうか。

私たちは対話によって、理解されているという安心感を得ているし、考えが異なっても人間としての普遍的な共通する土台があることを理解してもいます。対話によって得たその経験は、その後の、なかなか話が通じない他者との出会いにおいても、共存できるという肯定感と、討論をプラスに生かそうとする意志につながるのだと思います。

(暉峻淑子『対話する社会へ』, pp.58-91, 岩波書店, 2017年より, 一部改変)